

本研究班では、兵庫県姫路市および大阪府茨木市において「子育て中の親の悩みやニーズ、子育て実態などに関する調査」を実施した。調査は、市が実施している乳幼児健診の機会を利用し、実施した。対象者は、姫路市の場合、4か月児、10か月児、1歳6か月児、3歳児を育てている保護者である。また、茨木市の場合、4か月児、1歳6か月児、3歳6か月児を育てている保護者である。

姫路市での調査は、姫路市の全面的協力により実現したものである。調査は平成15年1月～平成15年度3月の3か月間（第1次調査）、および平成15年10月～平成15年度12月の3か月間（第2次調査）に実施した。姫路市での第1次調査の調査用紙は、昨年度報告書³⁾の中で資料1-4として示した。

第1次調査の具体的方法は以下のとおりである。

- ① 4か月児健診は一部医療機関委託であり、また10か月児健診はすべて医療機関委託である。そのため、健診対象者の保護者宛てに健診の案内と同時に調査への協力依頼文と調査用紙を郵送し、調査用紙を郵送にて返送してもらうという方法を取った。
- ② 1歳6か月児健診と3歳児健診については、医療機関委託はしておらず、保健所および2カ所の保健センターで実施している。そのため、健診対象者の保護者宛てに健診の案内と同時に調査への協力依頼文と調査用紙を郵送し、調査用紙は健診時に回収するという方法を取った。

第1次調査では、表B-1に示すように、4か月児健診および10か月児健診での回収率が良くなかった。そのため、第2次調査では回収方法を変更し、また、質問内容も少し変更して調査を実施した。すなわち、第2次調査では、4か月児健診と10か月児健診においても健診の場である医療機関および保健所にて回収することとした。その結果、回収率はかなり上がった。

茨木市での調査は、姫路市とは異なり、民間ベースのものである。そのため、茨木市での調査は姫路市における調査とは目的を少し異にしている。というのは、調査用紙の配布方法として、姫路市の場合のように全員に郵送するのではなく、健診前に健診場所（茨木市保健医療センター）に来所した保護者に対して『子ども“わいわい”ネットワークいばらき』のメンバー（民生児童委員協議会や保護士会婦人部など）が手渡しするという方法を取った。そして、回収は郵便による返送である。そのため、回収率は、4か月児健診：26.8%、1歳6か月児健診：26.8%、3歳6か月児健診：21.1%と低くなっている。『子ども“わいわい”ネットワークいばらき』の活動については、昨年度報告書³⁾の研究協力者（義若耕司、上村芳雄）報告を参照されたい。この調査の目的は単に調査そのものだけに置くのではなく、調査用紙と同時に『子ども“わいわい”ネットワークいばらき』の紹介パンフや公的子育て支援の情報を手渡すことにより、『子ども“わいわい”ネットワークいばらき』や公的子育て支援の情報を子育て中の保護者にひろく知らせることをひとつの目的としている。また、調査用紙の他に、返信用の葉書を同封し、「子育てについての相談の希望」の有無などについて聞き、今後のつながりの糸口にしようという試みもおこなった。

茨木市での調査は、回収率は低かったが、以下に述べるとおり、「大阪レポート」^{1・2)}と姫路市での調査結果（以後「兵庫レポート」と呼ぶ）の大きな違いが地域差によるものか、それともここ20数年の日本社会の変化が子育て現場に及ぼした変化なのか、を判定するのに大きな役割を演じた。結果は、姫路市と茨木市での調査結果は酷似しており、「大阪レポート」と「兵庫レポート」との差異は、20数年間の日本社会の変化によるものであると結論づけられた。

B-2 外国の児童虐待予防システムの研究

— 特にカナダの親支援プログラム“Nobody's Perfect”の実践的開発・研究 —

本研究班のメンバーが中心的役割をになっているボランティア活動『こころの子育てインターねっと関西』（URL：<http://www9.big.or.jp/~kokoro-i/>）が、カナダの親支援プログラム“Nobody's Perfect”のファシリテ

ーター養成講座を昨年9月に開催し、カナダ公認のファシリテーター資格を13名が獲得した。そして、昨年秋より、兵庫県姫路市や大阪府摂津市、池田市、河内長野市などで、実際に”Nobody’s Perfect”プログラムを実施している。また、毎月13名のファシリテーターが集まり、日本に合った親支援プログラムの開発のための研究会をもっている。

平成16年3月には、日本における”Nobody’s Perfect”プログラムのファシリテーター認定機関として、『Nobody’s Perfect Japan』(URL: <http://homepage3.nifty.com/NP-Japan/>)を立ち上げ、日本全国での展開をはかっている。

(倫理面への配慮)

- ①アンケート調査は無記名調査であり、個人情報 は 数 的 に 処 理 し、集 団 デー タ と し て の み 公 表 す る こ と に し て い る。ま た、研 究 目 的 以 外 に は 使 用 し な い こ と を 調 査 依 頼 時 に 該 当 者 に 周 知 し、実 施 し て い た。
- ②Nobody’s Perfect プログラムの実施に当たっては、参加者に対して秘 守 義 務 を 徹 底 し て い る。ま た、プ ロ グ ラ ム の 評 価 等 に お い て は 参 加 者 の プ ラ イ バ シ ー の 漏 洩 を 防 ぐ た め に、個 人 情 報 は 数 的 に 処 理 し、集 団 デー タ と し て の み 公 表 す る こ と に し て い る。

表B-1 「大阪レポート」と「兵庫レポート」(第1次調査)の調査対象者数と回答率

	大阪レポート(1980～1983年)			「兵庫レポート」(2003年)		
	対象者数 (人)	回答者数 (人)	回答率 (%)	対象者数 (人)	回答者数 (人)	回答率 (%)
4カ月児健診	1,766人	1,469	83.2	1,267	793	62.5
10カ月児健診	1,805人	1,488	82.4	1,327	763	57.5
1歳6カ月児健診	1,828人	1,545	84.5	1,354	1,193	88.1
3歳児健診	1,953人	1,541	78.9	1,294	1,151	88.9

C. 研究結果

ここでは、「A 研究目的」に掲げた3つの研究の柱の内、①「子育て中の親の悩みやニーズ、子育て実態などに関する調査」に関する研究方法を述べる。③については以下に掲載する協同研究者論文を参照されたい。また、兵庫県姫路市における「子育て中の親の悩みやニーズ、子育て実態などに関する調査」(「兵庫レポート」)は、多岐にわたる。そのため、調査結果と考察を別々の節にすると煩雑になるので、一括して述べる。なお、主に母親自身のことについては、「D 考察」として節を設けて考察する。

回答者の96%～99%を母親が占めていることから、本報告においては調査対象者の立場を「母親」と捉えて考察する。

C-1 母子をとりまく環境

C-1-1 住環境

4か月においては、住居建物形態は、一戸建てと集合住宅は約2対3の割合であるが、月齢が上がると共に一戸建ての割合が上昇し、3歳においてはほぼ同率となる。

「近所に子どもの遊び場になるような場所がありますか」という問に対し、4か月児健診では81%が「はい」と答えているが、これは年齢が上がると共に増加し、3歳児健診では97%になる。集合住宅よりも一戸建て住宅の方が、遊び場がやや少ない傾向が見られた。

近所の遊び場の有無と発達の関係が際立って現れたのは1歳6か月時健診で、近所に遊び場があることが、発達により影響があることを裏付ける結果であった。3歳児健診では、遊び方が多様になるためか、後に述べるようにテレビ・ビデオを視聴する時間が増え、外遊びに依存しなくなるためか、発達との関係は有意ではない。

C-1-2 家族構成

家族形態は、月齢の上昇と共に三世同居の割合がやや上昇する傾向がある。これは、母親の就労率が上昇することと相関があると考えられる。概してどの月齢においても80%以上が夫婦と子どものみの世帯となっている。子どもの数は4か月において平均1.63人、10か月1.65人、1歳6か月1.70人、3歳1.92人であった。

C-1-3 母親の就労

(1) 母親の就労と住居

女性の社会進出は「大阪レポート」^{1・2)}の時代よりも更に進んだのであろうが、子どもが3歳までの母親の場合、就労率はさして変化はない。子どもの月齢とともに急上昇するものの、働いている母親は、1歳6か月児の母親で26%程度、3歳児の母親で35%程度である。

母親の就労と住居の関係を見ると、一戸建ての住居の場合、母親の就労率が高い。経済的な必要性から就労していることも考えられるし、母親の収入が安定していれば一戸建て住宅を購入しやすくなるという状況も考えられる。

(2) 就労している母親と育児 —孤立と育児不安—

就労している母親の育児の状況について見てみると、「排泄や食事の世話以外に子どもと遊んだり散歩したりする時間」は、就労していない母親に比べるとはるかに少ないことがわかった。また、「近所に普段世間話をしたり、子どもの話をする人がいますか」という問に対しても、就労している母親の方が「数名いる」との回答率が低く、「いない」との回答率が高かった。また、「親子で一緒に過ごす子育て仲間がいますか」という問に対しても、就労している母親の方が「いいえ」との回答率が高かった。これを見る限り、就労している母親は孤立している傾向が強いと考えられる。

就労している母親の方が精神的には安定している

しかし、そのことが母親の精神的な状態にどう影響しているであろうか。孤立するほど育児不安も高いことが予想されるが、「育児で不安になることがありますか」との問に対する回答からは、就労している母親の方が不安が低い傾向が見られた。また、「あなたが育児について努力していることをほめて欲しいと思うことがありますか」という問に対しても、就労していない母親の方が「はい」の回答率が高かった。すなわち、働いていない母親の方が、「今の自分を認めて欲しい」との欲求がより強い傾向がうかがわれる。

以上のことから、就労している母親は、子どもの世話や遊び、近所とのつきあいのための時間的余裕は無いが、精神的な側面から見ると健康度が高いように思われる。就労していると、「お母さん」としてではなく、人間としての能力や個性を認められる機会が多い。また、子どもと離れてひとりの時間ももてる。一方、就労していない母親の場合、四六時中子どもと向き合い、親子関係が煮詰まってしまうことも多い。そのような状況下では、たまるストレスは解消・軽減しにくいものである。就労している母親は多様な役割を限られた時間の中でこなさなければならない大変さはあるものの、このような事態に陥ることからは救われているのではないだろうか。

「お子さんと一緒に遊ぶ同年代の子どもがいますか」という問に対し、母親が就労している場合、「数名いる」との回答率が高かった。これは、保育所等の関わりが大きいと思われる。一緒に遊ぶ同年代の子どもがいることは、子どもの発達にもよい影響を及ぼすことは、「大阪レポート」ですでに報

告されている。少子化の進行する現在、近所の公園に遊びに出ても同年代の子どもに出会う機会がないことは珍しくない。子育て支援施設やサービスを利用しなければ子どもはもちろん、親同士も交流の機会に恵まれない傾向が強くなってきている。母親の就労がこれらのサービスを利用することのきっかけになるのであれば、子どもの成長・発達にもよい影響が期待できるといえる。しかし、母親が就労すれば問題が解決するというものではない。就労する母親は、短い限られた時間の中でいかに子どもの現状を的確に把握し、親として濃密に関わるかを学び、身につける必要があるであろう。

C-1-4 子育て中の家庭の孤立 — 4人に1人が孤立している —

一緒に遊ぶ同年代の子どもの有無、近所でふだん世間話をする人の有無、親子で一緒に過ごす子育て仲間の有無の観点から孤立の実態を見てみると、住居建物形態とは特に関連は見られなかった。居住年数が短いと孤立の度合いも高いのではと考えられるが、これは予想に反した。居住年数の内訳を見ると、子どもの月齢に関わらず5年未満が最多であり、10年以内が過半数を占める。10年以上25年未満は少なく、25年以上になると再び増加する。意外なことに居住年数の長短に関わらず回答者の少なくとも4分の1は子どもに同年代の遊び仲間がなく、親にも子育て仲間や世間話をする相手がいないことがわかる。姫路市に居住して25年以上といっても一カ所に居住しつづけているとは限らないが、まったく他地域からの転入者よりは地域の事情に明るいと思われる。にもかかわらず孤立傾向の強い家庭が4分の1もあるというのが現代日本の特徴であろうか。一つの地域に長期間居住していても、どんどん少子高齢化・核家族化が進むうえ、プライバシーに敏感になりお互いの事情に深く立ち入らないようにする風潮の中での子育ては、想像以上に孤立感が深く根強くなっているのであろう。

子育て家庭の孤立化については、「D 考察」でさらに検討する。

C-2 子どもの毎日の生活

C-2-1 母乳栄養の状況

4か月児健診時点では、52%が母乳を与えているが、その内訳は、完全母乳は31%、混合が21%である。44%は人工乳を与えている。「大阪レポート」と比較して、母乳を与えている比率は6%上昇し、人工乳は9%減少している。これは、母乳栄養の利点が認められてきた結果であると思われる。

しかし、近年アトピー性皮膚炎、喘息などアレルギー疾患に罹患する子どもが増加し、発症年齢も低下する傾向が続く現在、母乳を与えると母親由来のアレルゲンが赤ちゃんに移行し、早期に感作が成立するなどの理由で、母乳を控える場合もある。また、乳汁に含まれるダイオキシン類も問題視されている。その一方で、人工乳の改良が進み、赤ちゃんの状態や成長段階に応じて様々な選択ができるようになってきた。とはいえ、母子関係を基盤とする子どもの精神発達の観点から、母乳栄養にまさるものはないであろう。ちなみに、お乳の与え方を見ると、母乳の場合、「泣いたら与える」が79%であるのに対し、人工乳は51%である。母乳を与えている母親の方が、赤ちゃんの自然な食欲のリズムに沿って行動していることがうかがわれる。人工乳は、与えた量を数字で把握できるため、授乳の間隔も時間で計る傾向が強まるのであろうか。授乳の時間を決めておくと、親は一日の計画を立てやすく過ごしやすい面はあるであろう。しかし、「空腹や不安で泣けば必ず親が助けに来てくれ、安心と満足を与えてくれる」という確固たる信頼感を赤ちゃんの心に築くという点では、どうだろうか。赤ちゃんを親のリズムに引き込むのではなく、赤ちゃんの体のリズムに親の方が寄り添うように過ごすのが子育ての基本であるという認識を広めたいものである。

母乳栄養の推進は重要である。しかし、先に述べたように、様々な理由で母乳栄養が難しくなっている。そのような現実を踏まえ、母乳栄養でなくても、できるだけ赤ちゃんの生理的な欲求に応える形で養育することの必要性についての啓発活動が必要であろう。

C-2-2 ミルクの与え方

4か月児における1回のミルクの量は200~240ml程度と思われるが、100mlに満たない例や250ml

以上という例が少数ながら存在する。1日に与える回数は、標準的には5回前後と思われ、今回の調査においても、5回をピークに、6回、4回と続くが、8回、9回は多すぎるように思う。逆に1回、2回というように少なすぎる例も見受けられる。ちなみに、一日に飲ませるミルクの量を積算すると、600ml未満の例や、1300ml以上という極端ともとれる例がある。量・回数が少ない例については、混合栄養の回答者が誤答したとも考えられるが、多すぎる例については、赤ちゃんの健康状態や育児の状況が気になるところである。

C-2-3 食事の時刻・所要時間

朝食の時刻は、10か月児の場合、午前8時台が最多であり、1歳6か月児は9時台になり、3歳児では再び8時台が最多となるが、10時台、11時以降という例もかなり見られる。朝食の所要時間は、10か月児では10～19分が最多であり、1歳6か月、3歳はともに30～39分が最多となる。

昼食はいずれも12時台が最多であるが、14時台、15時以降の例もあり、これではもはや昼食とは言いがたい。昼食の所要時間についても、朝食と同じような傾向であるが、1歳6か月児、3歳児においては、30～39分かかる子どもの率が朝食の場合よりも増加している。

夕食の時刻は18時台、19時台が最多である。20時台、21時以降の例も少なからず見られる。夕食の所要時間は、朝食、昼食に比べ更に延長する傾向が見られる。

食事の時刻が常識的な時刻から大きく外れている場合、子どもの生活リズムがどうなっているのか大変気になる。大人的生活時間帯に子どもが影響され、子どもが本来持つ自然なリズムが失われていると思われる。子どもは環境への適応能力が大人よりはるかに高いので、今の時期は毎日が問題なく過ごせているように見えても、やがて成長し集団生活に入る時期になると、様々な形で適応困難を露呈するようになる可能性がある。大人の方が子どものリズムに合わせることの大切さの啓発活動が必要であろう。

食事の所要時間についても、子どもが食事を意識しよく味わいながら食べる時間は多く見ても30分以内と考える。しかし、30～39分はいささか長いように思う。ましてや40分、それ以上となると、子どもは遊び食べをしていることが予想されるし、この間の大人の視線はどこを向いているのかが気になる。また、10か月、1歳6か月、3歳と年齢が上がるにつれ、所要時間が延長する傾向は顕著になる。これは、テレビを見ながら食事をするかどうか、という点と関係が深いように思う。テレビについては「食事の情景」で後述する。

C-2-4 食事の方法で変わる子どもの発達

食事の方法は、10か月児においては、「スプーン、フォークを使って食べようとしている」が12%、「手づかみで食べている」が15%であるのに引き換え、「親が全部食べさせている」との回答が69%との多数を占めた。10か月児であれば、手でものをつかみ、何でも口へ入れようとする月齢である。手づかみで食べることを始めるのはごく自然であると思われるが、実際にそれを行っている子どもが少なすぎるように見受けられる。1歳6か月児においてさえ、「全部親が食べさせている」との回答が4%もある。この値は「大阪レポート」でも同じであるが、これは子どもの側の問題なのか、親の側の問題なのか、検討を要するであろう。

「大阪レポート」と同様、今回の調査においても、子どもの発達と食事の方法は強い相関を示した。10か月児、1歳6か月児のいずれの場合にも、すべて親が食べさせている子どもは操作性運動の発達と言語・社会性発達の両者において、はっきりと遅れが見られる。

食事を自分で食べられるようになるまでには、子ども自身も周囲も汚れてしまうのはしかたがない。親もそれなりの覚悟と忍耐が必要であるが、現代の親にとってもむずかしいことのように思う。最近ではコップで飲むより先に、ストローで飲むことを覚えさせる親が目立つ。また、哺乳瓶からストローに移行させるべく、意図的に作られた商品も出回っている。このような傾向は子どもが飲み物をこぼしたり、着衣や周囲を汚したりすることを嫌ってのことであろうが、親の感覚に子どもを従わせるの

ではなく、子どもの意欲を大切にしながら見守り、待つという姿勢がなければ、本来順調なはずの子どもの発達を阻害することにもなりかねない。こぼす、汚すなどは、大人にとって都合がよくないだけで、子どもにとってはそれも重要な学びである。子どもの心身ともにすこやかな成長には、そのようなことが欠かせないものであることを伝えていく必要があるであろう。また、こぼしたり、汚してもそれほど困らないような工夫を伝え、子育てのスキルアップをはかるような取り組みも必要であろう。

C-2-5 食事で特に気をつけていること

「子どもの食事で特に気をつけていることを2つ選んでください」という問の結果は、「大阪レポート」の結果とほとんど同じであった。「栄養のバランス」との回答は、10か月児健診で80%、1歳6か月児健診および3歳児健診においても70%前後と最多であった。次に、「食べる量」が続き、10か月児健診、1歳6か月児健診、3歳児健診のいずれにおいても50%前後であった。子どもの年齢で大きく変化するのは「しつけ」である。子どもの年齢が高くなるほど高率を示し、10か月児健診：10.4%、1歳6か月児健診：28.5%、3歳児健診：42.5%となっている。

「大阪レポート」では、11か月児健診、1歳6か月児健診において、食事の時に気をつけている点のうち、「食べる楽しみ」を上げた母親の子どもは操作性運動発達と言語・社会性の発達が他の子どもに比べて際立ってよいとの結果が出ている。今回の調査では、「食べる楽しみ」と発達の関係において差が見られたのは10か月児健診の言語・社会性の発達と運動発達であり、1歳6か月児健診、3歳児健診では特に差は見られなかった。

「食べる楽しみ」が発達を促す、と強調できるほどの根拠はないものの、食事の時、何を重要視するかは親の価値観であり、ここから育児に対する親の姿勢をうかがい知ることはできる。そこで、食事の時の留意点と、育児の様子について関係を調べてみた。すると、「食べる楽しみ」を上げた親は、すべての年齢において、「育児でいらいらすること」が少ないという結果が出た。育児を楽しむ親の態度が子どもをのびのびとさせ、結果的に発達に良い影響を及ぼすことは十分考えられる。また、「栄養のバランス」を上げた親は、すべての年齢において、「子どもが何を要求しているかわかる」と答える率が高かった。しかし、発達に対する影響については特に関連は見られなかった。

3歳児健診になると、他と違う傾向が現れる。食事のときの留意点として、「しつけ」を上げる親は全体の40%を越えるが、その半数以上が「育児でいらいらすることが多い」と回答している。「しつけ」を重要視すれば、子どもが思い通りにならないことに苛立ちを感じやすいであろう。しかし、「しつけ」を上げている親の子どもの発達は良好な傾向があり、中でも言語・社会性の発達がよい。親の育児態度がこのような結果を招いたともとれるが、子どもの発達がよいからこそ親がしつけようとする傾向が強まるともとれる。したがって「しつけ」を重要視することが発達に良い影響をおよぼすとは即断できない。

C-2-6 食卓の情景：誰と食べているか

「夕食はどのように食べていますか」との問に対し、10か月児健診、1歳6か月児健診、3歳児健診のいずれにおいても、「家族みんなで食べる」との回答は44~47%を占めているが、「父親以外みんなで食べる」、「子どもだけで食べる」の回答は子どもの年齢によりかなり違いが出ている。「父親以外みんなで食べる」との回答は10か月時健診：26%、1歳6か月児健診：38%、3歳児健診：44%と年齢とともに増加している。また、「子どもだけで食べる」との回答は、10か月時健診：26%、1歳6か月児健診：10%、3歳児健診：4%と年齢とともに減少している。「大阪レポート」は、「夕食は家族と一緒に食べますか」という問に「はい」「いいえ」という回答のみで、「はい」が88%となっている。しかしこの場合、家族に父親が入っているかどうかは不明であった。

10か月児健診では、26%が「子どもだけで食べる」と回答している。10か月児であれば、まずほとんどが離乳食であろうし、先に述べたように全体の70%が「親が全部食べさせている」という状

況であるから、まず子どもに食べさせ、そののちに親が食事をする、ということかと考える。しかし、親は子どもの目の前できちんと食事をする手本を見せたほうがよいのではないだろうか。実際、10 か月児健診の場合、「子どもだけで食べる」と回答した親の子どもは、「家族みんなで食べる」、「父親以外みんなで食べる」と回答した親の子どもと比べ、操作性運動発達が遅れている率が高い。

「父親以外みんなで食べる」という回答も、年齢が上昇するにつれ増加しているが、父親の仕事が忙しくなり、家族が食事をする時間までに帰宅できない、という側面もある。父親の育児への協力と、夕食の状況の関係を調べると、「家族みんなで食べる」と回答した親については、父親が育児に協力的であることが明確に出ている。家族みんなで食事のできる時間帯に帰宅が可能な父親であれば、時間的な余裕もあり、母親に協力しやすいであろう。しかし、育児に協力的か否かは単なる在宅時間の長短の問題ではないと考える。食事の場合は、たとえ短時間ではあっても子どもの成長や、母親の育児のエッセンスを目の当たりにする場である。この場に同席している父親と、そうでない父親とでは、育児の大変さに対する認識や、自らも積極的に育児に協力しようという意識に違いが出て不思議ではない。結果として育児への協力にも差が出るのは当然かもしれない。

C-2-7 食事中のテレビの視聴について

「食事はテレビを見ながら食べていますか」との問に対し、10 か月時健診では 30%、1 歳 6 か月児健診では 39%、3 歳児健診では 46%が「はい」と回答している。どの年齢にもいえることだが、食事中にテレビをつけている場合、食事にかかる時間は延長する傾向がある。テレビの方に気を取られながらも、きちんと食物を咀嚼しかつ味わうなどということは、3 歳までの乳幼児にはまず不可能と思われる。実際、「食事のとき、お子さん（赤ちゃん）はどうしていますか」とのクロスをとってみると、10 か月児健診、1 歳 6 か月児健診のいずれにおいても、テレビを見ながら食事をしている場合、「親が全部食べさせている」との回答が他に比べて高率であった。子どもがテレビを見ながら口をあげ、そこへ親が食物を入れ込んでいる状況が想像される。親は早く片付けることができるので楽かもしれないが、これでは子どもの発達の足を引っ張ることになってしまう。実際、一日にテレビを見る時間がぐっと増える 3 歳児では、テレビを見ながら食事している群は明らかに言語・社会性の発達が遅れる傾向が見られた。テレビに気をとられて食事の時間は不必要に長くなり、結局遊び食いになる可能性もある。毎日の食事のあり方が子どもの発達にいかにより多くの、しかも大切なものを積み重ねるか、そのあたりの啓発活動が必要であろう。

C-1-8 テレビについて

長時間テレビ・ビデオをひとりで見ている子どもたち

前述の食事の部分でテレビのことは少し取り上げたが、ここでは日常生活との関係について述べる。子どもたちは、一日にどのくらいテレビ・ビデオを視聴しているかを調べた。すると、10 か月児健診では「見ない」が 36%、「30 分前後」が 41%であるが、3 時間以上との回答が 4%もある。1 歳 6 か月児健診では、「見ない」は 11%に減り、1～2 時間が 38%と最多を占める。3 時間以上視聴している子どもは 14%に増えていた。3 歳児健診では、やはり 1～2 時間との回答が最多で 47%を占めるが、3 時間以上視聴している子どもは実に 23%に達する。

ちなみに「大阪レポート」と比較すると、11 か月児健診では約 60%、1 歳 6 か月時健診では 45%、3 歳半児健診で 26%がテレビを一人では見ていない。また、3 時間以上テレビを見ている子どもの割合は、11 か月児健診で 17%、1 歳 6 か月児健診で 1.4%、3 歳半児健診で 6%であった。11 か月児健診の結果は大阪レポートの記述にもあるように常識の範囲を越えているように思うが、1 歳 6 か月児、3 歳児と 3 歳半児を比較すると、その変わりように驚きを禁じえない。また、最近子ども向けのビデオが普及しており、この影響も更に大きいことであろう。子どもが同じものを繰り返し巻き返し見ている光景はいささか異様ではないだろうか。

テレビ・ビデオの長時間視聴は子どもの発達に悪い

長時間のテレビ・ビデオの視聴が、子どもの発達にどのような影響を及ぼしているか調べてみると、10か月児健診では、明確な関係は見られなかったが、1歳6か月児健診では言語・社会性の発達が遅れる傾向があり、3歳児健診では操作性運動発達と、身辺自律において遅れる傾向が明確に見られた。テレビ・ビデオは一方的に音声や画像を送ってくるだけであるから、言語の発達にプラスに寄与するとは思えない。また、操作性運動の発達の遅れは集中力のなさ、身辺自律の遅れは自発的な意欲の少なさを表すように思われる。それはそのまま現在の青少年においても、問題視されている傾向ではないだろうか。また、1歳6か月児健診、3歳児健診のどちらにおいても、視聴時間が長いほど、子どもの外遊びは少ない傾向が見られた。このことから、子どもの発達に好ましくない影響があることは想像に難くない。テレビ・ビデオはあまりにも深く日常生活に根をおろしている。マイカーの中にも、はては浴室にまでテレビが設置される時代である。それ故に問題意識は更に薄らぐ一方であろうが、子どものテレビ・ビデオの視聴や時間については、社会全体として改めて見直してみる必要があると考える。

子どものテレビ・ビデオの視聴と親の育児姿勢

ところで、子どもに長時間テレビ・ビデオを見せる親は、普段育児にどのような思いを持ち、どのような育児態度なのだろうか。10か月児健診、1歳6か月児健診のいずれにおいても、3時間以上子どもにテレビ・ビデオを視聴させている親は、「お子さん（赤ちゃん）が、何を要求しているかわかりますか」との問いに対し、「はい」と答える率は他の群に比べて低く、「お子さん（赤ちゃん）にどうかかわったらいいか迷う」、「育児に自信がない」という傾向が見られた。3歳児健診においては、視聴時間が長くなるにつれて、「育児でいらいらすることが多い」と回答する率が増え、「お子さんに話しかけながら世話をしたり、遊んだりする」率が減少する傾向が見られた。以上の結果から、親の育児不安やストレスが高いことが、子どもの長時間のテレビ・ビデオの視聴と因果関係がありそうである。親としての自信のなさや育児のストレスは、子どもをテレビの前に座らせておけば解決するものではない。具体的な解決のためには、親として学び成長する機会や資源を得ることが必須と考えるが、実際にはなかなか得られないだけでなく、「親を癒し、成長を促す」効果のあるサービス自体が今の日本にほとんどないのが現状と思われる。

C-1-9 睡眠 — 大人の生活に引きずられる子どもたち —

起床時刻は、10か月児健診では7時台、8時台が最多、3歳児健診では8時台が最多である。就寝時刻は、どの健診においても21時台、22時台が最多であるが、「大阪レポート」と比べ、起床、就寝ともに1時間近く遅い方へシフトしている。これも大人の生活時間帯に子どもが合わせている結果と思われる。夜は10か月児でも22時の就寝が最多とは驚きである。夜更かしの結果であろうが、10時以降に起床する子どもも少なくない。

日常の起床・就寝のリズムは、3歳児健診では、16%もの子どもが、起床・就寝の時間が決まっていない。10か月児健診、1歳6か月児健診では、いずれも13%であるのに対し、3歳児健診でむしろ増えているのはどういうことであろうか。ここでまたテレビ・ビデオとの関係を見てみると、3歳児健診においては、「テレビ・ビデオを見ない」群をのぞき、視聴時間が長いほど起床・就寝のリズムが確立していないことが明白である。活発に身体を動かして遊ぶことが少ないからであろうか。一日のめりはりがつきにくい状態がうかがわれる。

昼寝については、長くとも2時間程度と考えるが、3時間以上とる子どもが少なくない。3歳児においてすら、6%が3時間昼寝をしている。昼間にこれほど眠ってしまうと、夜は入眠が困難になるのが当たり前である。昼はよく遊ばせ、夜にしっかり睡眠をとらせたいものである。

子どもの体内時計は、生後に確立するものである。体内時計が確立していない子どもたちの増加が気になるところである。

C-1-10 入浴

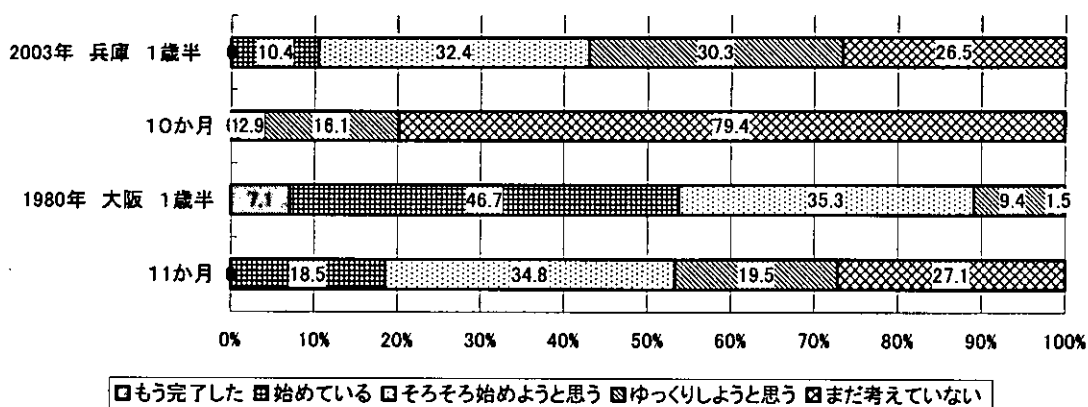
入浴の間隔は、96～98%が1日1回、3～4%が2～3日に1回と回答しており、特に問題はないと考える。

C-1-11 トイレトレーニング

図C-2に「トイレトレーニング（おしっこ）は始めていますか」という質問の結果を「大阪レポート」の結果と比較して示している。トイレトレーニングの開始時期、および完了も「大阪レポート」の頃に比べ、随分とゆっくりしている。10か月児健診で見ると、「大阪レポート」では11カ月ではあるが、「始めている」：18.5%であるが、本調査では1.0%、同様に「そろそろ始めようと思う」：34.8%⇒2.9%、「ゆっくりしようと思う」：19.5%⇒16.1%、「まだ考えていない」：27.1%⇒79.4%。1歳6か月児健診時点では、「大阪レポート」では「もう完了した」が7.1%であったものが、本調査では0%である。同様に「始めている」：46.7%⇒10.4%、「そろそろ始めようと思う」：35.3%⇒32.4%、「ゆっくりしようと思う」：9.4%⇒30.3%、「まだ考えていない」：1.5%⇒26.5%と母親の意識は大きく変化している。「最近紙おむつが普及し、汚れれば捨てる気軽さも手伝い、トイレトレーニングは以前と比べて先延ばしになるようである。このこと自体が問題かどうかは議論のあるところであるが、1歳6か月児健診において、「まだ考えていない」が26.5%、3歳児健診において、「ゆっくりしようと思う」（2.6%）「まだ考えていない」（0.3%）との回答は、子どもの側に特別な事情がないのであれば、遅すぎるように思う。排泄の自律に関係する要因として、「母親の就労」がある。排泄が自律している方が、子どもを預けやすいので、母親もトイレトレーニングに熱心になるであろう。また、保育所に入所した場合は、保育士による支援が関与していることも考えられる。

ここに示したトイレトレーニングにみる母親の意識の変化は、紙おむつが大きな原因であると考えられる。しかし、タイミングの良いトイレトレーニングを通して、子どもの心は大きく成長するものであり、かつてはトイレトレーニングのタイミングと方法はきわめて重要視された。そういう点では、子どもたちは心の発達のひとつの重要なきっかけを逃しているとも考えられる。このように次々に開発される商品により、子どもの育ちの機会がうばわれるという現象はいたるところで生じてきている。

図C-2 トイレトレーニング（おしっこ）は始めていますか



C-1-12 子どものけが・やけど

「やけどをしたことがありますか」と「大きなけがをしたことがありますか」という間に「はい」と応える率は子どもの年齢とともに上昇し、3歳児健診では「けが」が21.0%、「大きなけが」が8.9%である。これらの率は「大阪レポート」での値とほとんど同じである。しかし、「大阪レポート」でも指摘しているように、これらの率は高いと思う。

現在子育て中の親の多くは、自分の子どもができるまでは、乳幼児と生活を共にした経験がないの

で、乳幼児にとって危険なものは何か、それを先ず認識することから始め、環境を整える必要がある。子どもの事故防止の啓発が重要である。興味深いことに、1歳6か月児健診において、「育児でいららすることが多い」と回答した親の子どもに、けが・やけどが多い傾向があった。10か月児健診、3歳児健診ではややその傾向はあるものの有意差はなかった。1歳6か月といえば、活発に動き回るようになってきてはいるが、まだ言葉による親の指示がしっかり理解できない時期である。親の「いらら」も活発な子どもを危険から守りたくとも、うまく制止できないところに原因があるのかもしれない。

C-1-13 歩行器の使用状況

10か月児健診において、「歩行器を使うことがありますか」という間に、43%が「はい」との回答している。赤ちゃんが自立歩行を獲得するために、歩行器は特に必要なものではない。少数だが使用時間数が数時間に及ぶ場合がある。そのような場合には、やはり赤ちゃんの発達に対する影響が気になる。「大阪レポート」では、歩行器を使用している赤ちゃんは、運動発達が悪いとの結果が出ていた。今回の調査では統計学的に運動発達との関係に有意差はなかった。しかし、未だに「歩行器が自立歩行獲得のために役立つ」と信じている親がいることも事実であり、歩行器に関する正しい認識を広める必要がある。

子どもたちが乳幼児期を健全に過ごせるような社会環境の構築を！

以上子どもの生活および環境を俯瞰してきたが、子どもの毎日の生活がいかに大人のペースに巻き込まれているかを目の当たりにした。子育て中の親が、子どもが本来持つ自然な生活リズムを大切に、無理のかからないような生活ができるように働きかけることが急務であることが判明した。

乳幼児期からの生活リズムの乱れが、長じてからどのように影響するのか、現段階で明確な解答は出ていないが、最近小学生に急増している「キレる子」の問題に象徴されるように、子どもたちはすでに心のSOSを発している。

乳幼児期から思春期前までに、心身の成長に望ましい生活習慣をどれだけしっかり積み上げられたかは、人格形成に極めて大きなものである。子ども自身の環境への適応力の高さゆえに、乳幼児期の毎日はいかにも平穩に過ぎていくであろうが、その実、子どもの心と身体にどのようなことが起きているのか、この報告がそれを知る糸口となればと願っている。

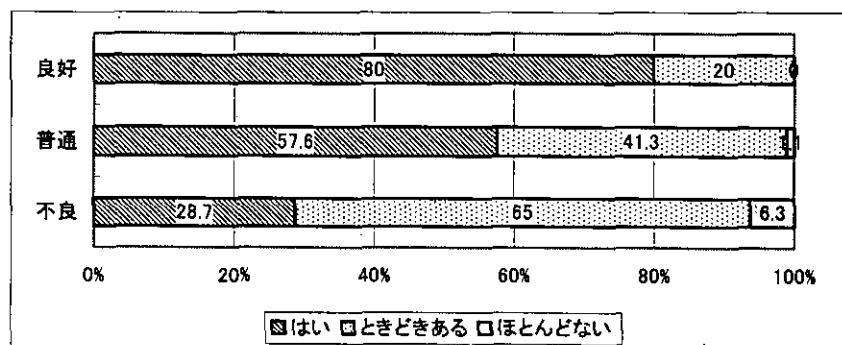
C-3 子どもの発達と環境

C-3-1 子どもの発達は生育環境に大きく影響される

子どもの発達に関する本調査結果は、「大阪レポート」の結果とほとんど同じであった。つまり、4ヶ月で言うと子どもの発達と「手にものを持たせたことはありますか」「日光浴をさせていますか」

図C-3 4か月児健診での子どもの心身発達と

「手にものを持たせたことはありますか」とのクロス集計結果(「兵庫レポート」)



「天気の良い日は外で遊ばせますか」という生育環境に関する項目は、強い相関を示した。前回調査の「うつぶせね」との関連は今回質問していない。子どもの発達にとって生育環境がきわめて重要であるという「大阪レポート」の結果を今回の調査が追認したと言える。

C-3-2 子どもの発達を伸ばす親の関わり

子どもの発達とのクロス集計において有意差の見られた項目から、以下のことが言える。()内は、有意差が見られた月齢である。

- ① 話しかけながら世話をしたり遊んだりの方が子どもの発達はよい。(4か月、10か月)
- ② オムツや食事の世話以外に遊んだり散歩したりする時間が多い方が子どもの発達はよい。(4か月、10か月、1歳半)
- ③ 育児不安の少ない方が発達がよい。(4か月、10か月、1歳半、3歳)
- ④ 育児で「いらいら」「心配」などのストレスは発達によくない。(10か月、1歳半、3歳)
- ⑤ 子どもの要求が理解できている親の子どもほど、発達がよい。(10か月、1歳半、3歳)
- ⑥ どう関わったらいいか、迷ったり、自信がもてない親の子どもほど発達がよくない。(10か月、1歳半)
- ⑦ 子どもと一緒に遊ぶ友だちが多いほど発達がよい。(10か月、1歳半、3歳)
- ⑧ 近所でふだん話をする人がいる方が発達によい。(10か月、1歳半、3歳)
- ⑨ 出産以前の子どもとの接触経験や育児経験がある母親の子どもは発達がよい。(10か月、1歳半、3歳)
- ⑩ 出産が肯定できるほど発達がよい。(10か月)
- ⑪ 他の子どもと比較して自分の子どもをみない母親の子どもは発達がよい。(10か月)
- ⑫ 父親が育児に協力的なほど子どもの発達はよい。(4か月、3歳)
- ⑬ 父親が子どもとよく遊んでくれる方が発達がよい。(4か月、10か月、1歳半、3歳)
- ⑭ 夫婦でよく話し合っている家庭の子どもの方が発達がよい。(4か月、1歳半)
- ⑮ 体罰は、子どもの発達によくない。(1歳半)
- ⑯ 親子で一緒に過ごす子育て仲間がいる方が発達がよい。(1歳半、3歳)
- ⑰ 育児にモデルとなる人を持っている方が、子どもの発達によい。(3歳)

C-3-3 子どもの発達と関係がありそうな項目で、「大阪レポート」ではなかったものについて

(1) 母親の仕事と子どもの発達

「大阪レポート」では、母親の就労と発達の関連は見られなかったが、今回の調査では、1歳半において母親が仕事をしているのは全体の25.2%しかいないが、仕事をしている方が、子どもの発達が良好な傾向にあった。なお、母親の就労に関しては、第2次調査において詳細に検討し、来年度の報告書にて報告する。

(2) テレビと子どもの発達

「大阪レポート」では、テレビと子どもの発達に相関は見られなかったが、今回は、1歳半において有意な差が見られた。テレビやビデオを見せない方が、発達がよかった。

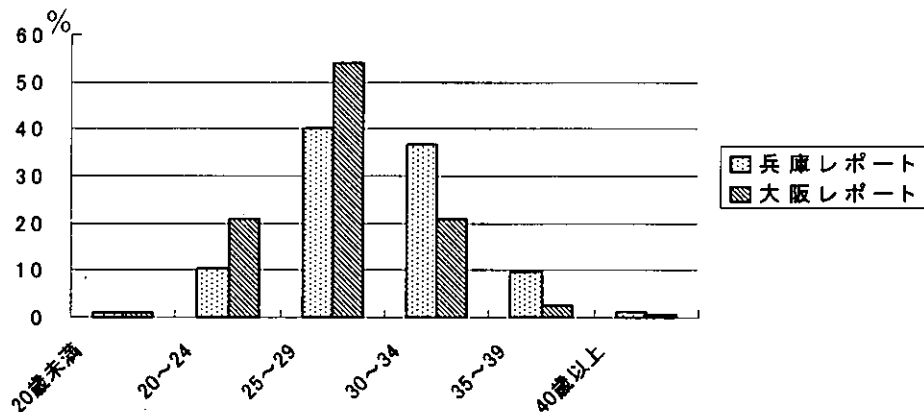
C-4 母親について

母親については、「D 考察」で考察することにし、ここでは母親の年齢に関してのみ述べる。

母親の年齢は、4ヶ月児では、25歳から29歳が40.1%と最も多く、続いて30歳～34歳：36.7%、20～24歳代：10.5%、35歳～39歳：9.8%、40歳以上：1.4%となっている。図C-4に「大阪レポート」と比較して示しているが、母親の年齢が高くなっていることがわかる。これは、昨今の晩婚化現象を反映したものである。

73 年が第二次ベビーブームのピークであるが、本調査の対象となった母親たちの多くは 1970 年代前後から 75 年頃までの第二次ベビーブームの時期に誕生し育った年代である。経済面ではオイルショック後も経済大国として急速に発展。家庭生活においても電化製品の発展・普及等、物の豊富な時代に育っている。都市への人口集中、核家族化の浸透が顕著になる一方で、公害問題等の環境破壊・さらに家族養育機能低下が指摘されてきた時代でもあった。

図C-4 母親の年齢(4カ月児健診時点)

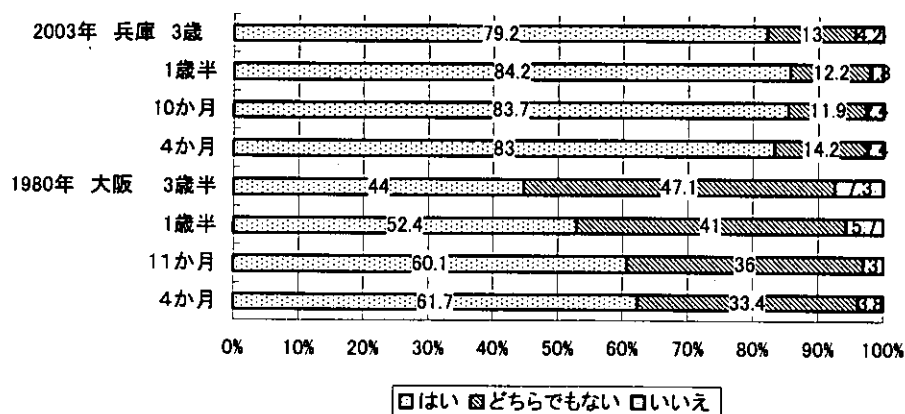


C-5 父親について

日本社会ではこの 20 数年間に親子関係や夫婦の役割関係、男女の地位、結婚観・離婚観などに関する価値観が大きく変動した。本調査結果はそれらの変化が子育て現場をも大きく変化させているという現実を実感させるものであった。ここで取り上げる「父親」についての調査結果もまったく予想していない結果になっている。

1995 年のエンゼルプラン施行以降、厚生労働省のポスターの「子育てをしない男を父親とは呼ばない」というキャッチフレーズが話題となるなど、父親の子育てへの参加とその責任が自明のこととして語られるようになってきている。そして、その方針はその後の国の児童福祉施策においても引き継がれている。次世代育成対策推進法(平成 15 年 7 月 16 日法律第 120 号)では、事業主の責務として男性も含めた「労働者の職業生活と家庭生活との両立が図られるようにするために必要な雇用環境の整備を行う」ことが明記された。このような国の施策の流れもここ 20 数年の日本社会の価値観を象徴するものである。

図C-5 お父さんはお子さんと一緒に遊びますか



C-5-1 「父親は育児に協力的」と感じている母親が非常に増えている

大阪レポートが実施された約 20 年前と比較すると、「父親は育児に協力的である」と回答する母親の

割合は、子どもの年齢に関わらず顕著に増加している。特に4か月児健診、10か月児健診の調査対象者の回答は、「大阪レポート」の結果と比較して約40ポイントも上昇しており、70%以上の母親が「父親は育児に協力的である」と回答している。

C-5-2 父親は子どもとよく遊んでいる、と感じている母親が顕著に増加している

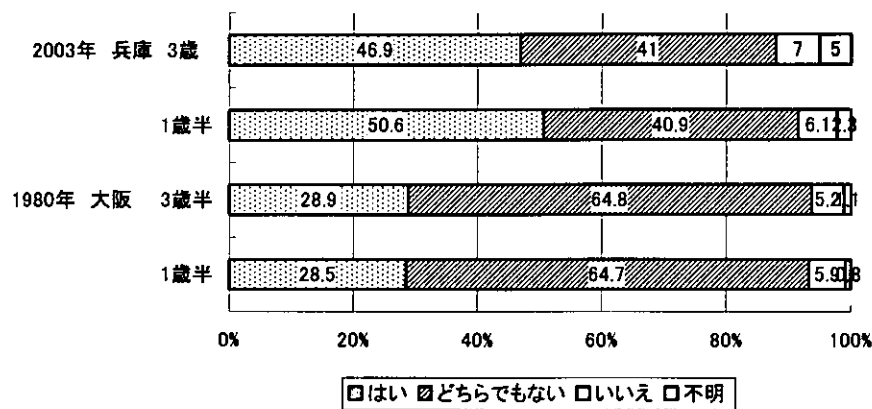
「お父さんはお子さんと一緒に遊びますか」という質問結果を「大阪レポート」の結果と比較し、図C-5に示している。図からわかるように、「大阪レポート」と比較して、本調査では父親が子どもとよく遊んでいる様子が窺える。4か月、10か月、1歳6か月、3歳、どの年齢の子どもをもつ母親も「父親は子どもとよく遊んでいる」と感じている。「はい」と応えるパーセンテージは、3歳児をもつ母親で79.2%となるものの、他の年齢においては、80%を超える母親が「父親は子どもとよく遊んでいますか」の質問に対して「はい」と回答している。

また「大阪レポート」においては、図C-5からわかるように、子どもの年齢の上昇に伴って「父親が子どもと遊ぶこと」が減少する傾向にあるが、今回の調査においては、数値的には3歳児で若干の減少が見られるものの、有意な差は認められなかった。したがって今回の調査の結果からは、母親は、子どもの年齢に関わらず「父親は子どもとよく遊んでいる」と感じていると言える。

C-5-3 子育てについての話し合う夫婦が増えている

図C-6には、「育児について夫婦でよく話し合いますか」という質問結果を本調査と「大阪レポート」の結果とを比較して示している。この質問においても本調査の「はい」の回答率が、「大阪レポート」の回答率を大きく上回っている。1歳6か月児健診では22ポイント、3歳児健診では18ポイントの差が認められ、20数年前に比較して子育てについて夫婦で話合っていると感じている母親が増加している。

図C-6 育児について夫婦でよく話し合いますか



C-5-4 子どものことを夫婦でともに責任をとり、関わろうとしているか

「子どものことに関しては、一方の親だけが責任をとり、他方はまかせきりですか」に「いいえ」と回答する母親の割合は、4か月児健診:77.4%、10か月児健診:74.1%、1歳6か月児健診:75.1%、3歳児健診:72.6%であった。「大阪レポート」では、「いいえ」の割合が若干高くなっているものの、その差は10ポイント以下であり、有意差は認められなかった。つまり、72%以上の母親が子育てを夫婦で共に取り組んでいると感じており、その傾向は20年前も現在もあまり変わりはない。(図D-1の親子関係のレダーチャートを参照のこと)。

C-5-5 育児をする上で父親は母親の頼りになれているか

育児をする上で父親が母親の頼りになれていることが、母親の育児に対する不安を軽減したり、母

親が育児を肯定的に捉え取り組むための支えとなるであろうことは容易に想像しうる。実際に柏木ら（1996）の調査によれば、夫の育児へのコミットメントが高い群では、母親の子どもへの肯定的感情が増し、逆に父親の育児参加が低い群では、母親の育児による制約感やフラストレーションが増すという結果が報告されている⁴⁾。

「育児について心配なとき、一番たよりにする人はだれですか」という問に「父親」と答えた率は、4か月児健診：54.4%、10か月児健診：62.6%、1歳6か月児健診：56.2%、3歳児健診：55.0%であった。今回の調査では、4か月児健診、10か月児健診では「大阪レポート」の結果と比較して、大きな差は認められない。しかし、子どもの年齢が上昇するに伴って、「大阪レポート」では父親が頼りにされる割合が増加し、1歳6か月児健診：70.7%、3歳6か月児健診：75.4%となっていた。それに対して、今回の調査結果は子どもの年齢が上昇しても父親が頼りにされる割合はあまり変わっていない。結果として、今回の調査結果と「大阪レポート」との間に、1歳6か月で14.5ポイント、3歳では20.4ポイントの差が認められた。

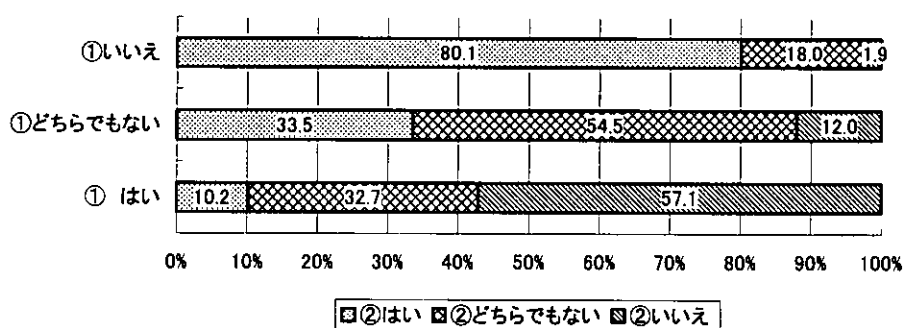
父親の育児参加を支援する動きが年々高まる一方で、子育てにおいて父親を「たよりにする」母親が増加していないという結果は、子育ての現状の一側面が表出したと考えられた。

C-5-6 母親が夫婦で子育てに取り組んでいると感じている家庭は、父親の子育てへの協力も多い

「子どものことは一方の親が責任をとり、他方はまかせきりですか」（以下一方の親任せ）と「お父さんは育児に協力的ですか」のクロスを行った（図C-7）。その結果、「子育てが一方の親に任せきりになっている家庭の父親は、子育てに協力的ではない」という傾向が顕著であることがわかった。逆に言うと、「子育てを一方の親に任せきりにしていない家庭の父親は、子育てに協力的である」と傾向がはっきりしていると言える。

「子どものことは一方の親が責任をとり、他方はまかせきりですか」（一方の親任せ）と「お父さんは子どもとよく遊びますか」クロス集計においても、図C-7と同様に明らかな傾向がみられた。すなわち、子育てが一方の親任せになっていない家庭では、父親が子どもとよく遊んでいるのである。

図C-7 「①子どものことは一方の親が責任をとり、他方はまかせきりですか」と「②お父さんは育児に協力的ですか」とのクロス集計結果（3歳児健診）



C-6 父親の子育てへの協力が母親の子育てに及ぼす影響

C-6-1 母親が一人で子育てを担っていることが、母親の子どもと遊ぶ時間に与える影響

「大阪レポート」においては、子育てを「一方の親任せ」にされている母親は、子どもと遊ぶことが少ない傾向が見出されていた。今回の調査においては、「大阪レポート」の質問項目と選択肢を変更したため、前回の結果との比較は行えないが、以下今回の結果を述べる。

「子どものことは一方の親が責任をとり、他方は任せきりですか」（一方の親任せ）と「お母さんが子どもと遊ぶ時間」のクロス集計を行った。遊ぶ時間は一日の平均的な時間を想定し、「ほとんどない」、「30分くらい」、「1時間くらい」、「2時間以上」で選択してもらった。その結果、子育てが「一方の

親任せになっている」群と「どちらでもない」群、「一方の親任せになっていない」群の3群間における、母親が子どもと遊ぶ時間の有意差は認められなかった。すなわち、現在では子育てが「一方の親任せ」になっていることは、母親が子どもと遊ぶ時間にあまり影響を与えていないと考えられた。

C-6-2 母親が一人で子育てを担っていることが、母親の育児における「イライラ」に与える影響

育児が一方の親任せになっている場合は、母親の育児における精神的ストレスがつのっていることは、前回の調査では実証されていた。しかし、今回の結果では、「一方の親任せ」になっている状況と、母親の育児における精神的ストレスの関係は実証されなかった。

今回の調査においても、前回調査と同様の傾向が見られるか検証するため、同じ質問項目を設定しクロス集計を行った。しかし、今回調査においては、子育てに夫婦で取り組んでいる状況においても、「一方の親任せ」の場合と同様に母親のイライラは生じていた。「子育てでイライラすることはありますか」の各群の「はい」の選択率は、「一方の親任せになっている」群51.9%、「どちらでもない」群53.8%、「一方の親任せになっていない」群44.9%となっており、3群間に有意な差はなかった。

「子育てできる環境」を父親に！

今回の調査結果においては、20年前の「大阪レポート」と比較して父親は子育てに協力的であり、子どもと良く遊び、夫婦で子育てについて話合っている姿が窺えた。一方で、20年前と比較して子育てで父親をたよりにする母親は、子どもが1歳6か月や3歳の時点では減っている。また、子育てが母親に任せられる傾向にあるか否かに関わらず、「子育てでイライラする」という母親は増加している。

この20年間、国、地方自治体、その他地域などで子育て支援に取り組み、その基盤を整備してきたことは多くの子育て支援メニューの具体化により確認される場所である。また子育てに夫婦で取り組むという意識の高揚は、子育てに協力的な父親や子どもとよく遊ぶ父親、そして子育てについて話し合う夫婦の増加という結果に現れている。しかしそれが真に母親の育児の支えになっていないことが、子育てが母親任せになっているか否かに関わらず、「イライラ」する母親が増加していることや、子育てにおいて父親を頼りにする人が増加していない結果から推察される。

これはどういうことであろうか。母親は、父親が「育児に協力的」であり、「子どもともよく遊んでくれる」と感じている。にもかかわらず、母親の「いらいら」は解消されていない。“Nobody’s Perfect”プログラムを実施している中で、「日常のイライラ」をテーマにしたことがある。「何がおこっているのだろうか」「何にイライラしているのだろうか」と母親同士で話をしてもらうのである。毎週1回（1回2時間）全8回のプログラムであるが、回も重ねてくると母親たち同士の話し合いも盛り上がる。このようなテーマを取り上げられるのは、5～6回目である。母親たちのあるグループでは、「子どものことでイライラばかりしていると思っていたけど、ほんとうは夫がいらいらの原因だったかも……」という結論を出した。「夫はいつも早くから遅くまで働いて、くたくたになっている。そんな中で、よく子どもの相手をしてきていると思うわ」というのが母親たちの共通の感想である。夫がくたくたになる程働かされて、夜も遅く帰って来るので、子どもの生活リズムも整えられない」と母親たちは訴える。父親がほんとうに育児に関わるような労働条件や物理的環境がないのである。そのような状況が本調査結果にあらわれているのではないだろうか。「子育てをしない男を父親とは呼ばない」というのであれば、「子育てできる環境を整える」ことが必要ではないだろうか。そうしないと、ますます結婚に魅力を感じられない若者たちが増えるであろう。

D 考察

この節では、本調査にあらわれた特徴的な結果を紹介しながら、今後の児童虐待予防方策の検討や子育て支援策・次世代育成支援策などを考えたい。

D-1 ほんの20年の間に、子育て現場はこんなにも大きく変化している！

かつて本分担当研究者である原田は、現在「大阪レポート」^{1, 2)}と呼ばれている1980年生まれの子ども達を対象とした大規模な子育て実態調査の集計・分析を担当した。この種の調査は多いが、科学的検討に耐えるデータは意外にないようで、平成15年度の「厚生労働白書」にも育児不安の項では「大阪レポート」のデータが使用されている。今回我々は、「大阪レポート」に匹敵する調査を実施することができた。姫路市での調査報告を「兵庫レポート」と呼ぶことにする。

原田は1995年に、親と専門職でつくる子育て支援のボランティア団体『こころの子育てインターねっと関西』(URL: <http://www9.big.or.jp/~kokoro-i/>)を仕事仲間や地域でグループ子育てを実践している母親たちと一緒に立ち上げた。本研究班のメンバーは『こころの子育てインターねっと関西』のボランティア仲間でもある。我々はあまり意識していなかったが、「エンゼルプラン」が始まった年は、ちょうど『こころの子育てインターねっと関西』が生まれた年にあたり。そのため、我々は国の子育て支援策の動向を子育て現場から、母親の視線を通して、ずっと見続けてきたことになる。

ここでは、2003年の「兵庫レポート」と1980年の「大阪レポート」の結果を比較検討する。そのことにより、子育て現場の状況の変化をしっかりと把握していただきたい。その上に立って、今ほんとうに必要な子育て支援とは何か、次世代育成のために何をしなければならないのか、について我々の子育て支援ボランティア活動の実践から保健師や保育士、行政職員をはじめとする子育て支援に関わっているみなさんへの期待をも述べたいと思う。

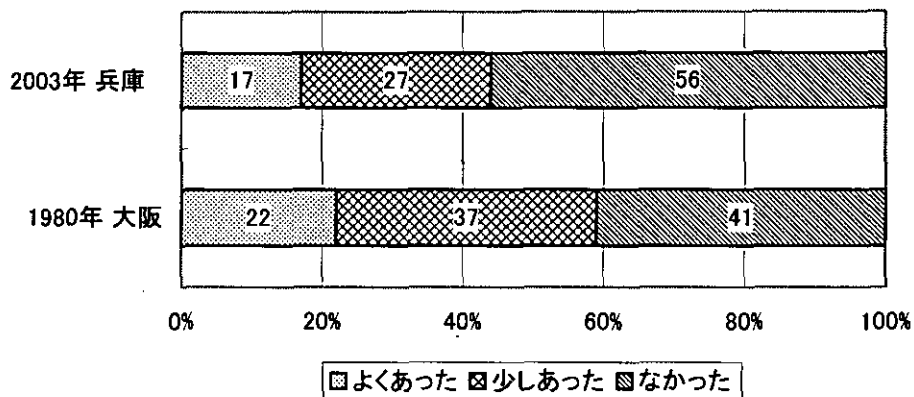
まず、単純集計結果をレビュー的に紹介する。これらの結果を見ることにより、この20数年の間に子育て現場はこんなにも変わっていることを実感してもらいたい。そして、時代の変化をしっかりと認識し、その変化に見合った支援の必要性を述べたい。

なお、回答者の99%が母親であったため、分析では母親の現状という形で報告する。

D-1-1 ますます増える乳幼児をまったく知らないまま親になる親たち

人間にとって経験ほど大切なものはない。人の思考や感情などは、自分自身の経験に支配される部分が非常に大きいものである。

図D-1 自分の子どもが生まれるまでに、食べさせたり、おむつをかえたりした経験はありましたか



図D-1に「あなたは自分の子どもが生まれるまでに、他の小さな子どもさんに食べさせたり、おむつをかえたりした経験はありましたか」という質問結果を「大阪レポート」の結果と比較して示す。1980年の段階では、そのような育児経験が「まったくない」という親は39%前後であったが、2003年の調査では、56%と増加し、半数以上になっている。逆に「よくあった」という親は22%から16%へと減少している。現代日本における子育ての困難さは、「親が乳幼児を知らない」ことにある、と我々はボランティア活動などを通して強く感じている。ここに示した調査結果はまさにそれを実証するものである。

「お子さんが何を要求しているかわかりますか」という質問に「はい」と答える率は、4か月児健診：61.0%、10か月児健診：70.1%、1歳6か月児健診：82.4%、3歳児健診：87.5%、である。一方、「大阪レポート」の結果は、4か月児健診：63.7%、11か月児健診：80.8%、1歳6か月児健診：91.8%、3歳6か月児健診：95.7%、であり、子どもの欲求の理解度が少し現象していることがわかる。

先行研究「大阪レポート」があるために、明確な結論が得られる

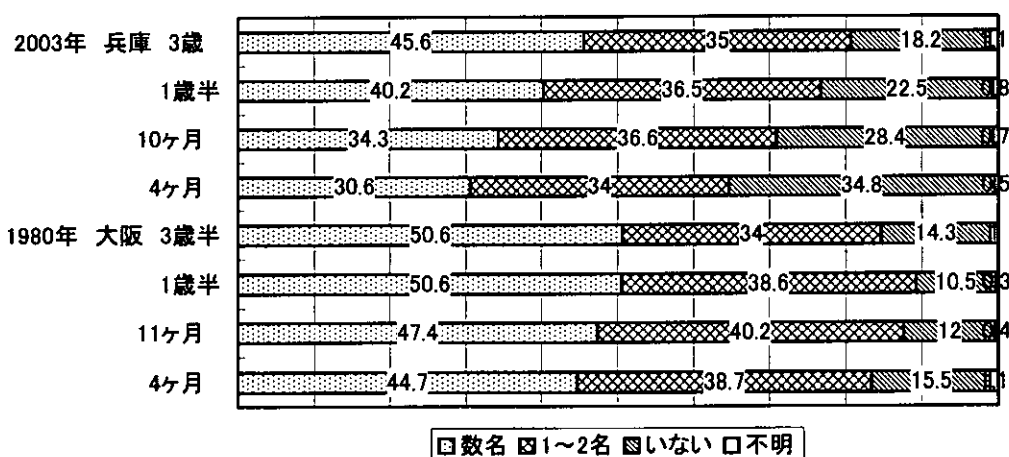
「大阪レポート」の場合、比較するデータが無かったため、その結果としてでてきた数値が、果たして多いのか少ないのか判断できない部分があった。しかし今回は、同じ質問を23年後におこなっているため、比較してみる事が可能です。そのため、この23年間の変化の方向やその大きさがわかり、かなり明確な結論が得られる。例えば、図D-1の質問結果からは、「自分の子どもを生むまでに、小さな子どもの世話をまったくしたことがない母親がかなり増加している」と結論づけられる。この傾向は「大阪レポート」の時点でも予測されていたものであるため、その傾向がさらに強まったという方が実態に則していると思う。今回の「兵庫レポート」は先行研究としての「大阪レポート」が存在するため、一層価値があると考えている。

D-1-2 進行する子育て家庭の孤立化

すべての人にとって「孤立」は最大の精神的ストレスである。特にまったく乳幼児を知らないまま親になった母親にとって、子育てについて日常的に話し合える子育て仲間の有無は、精神的安定にきわめて大きな影響がある。そして、親の精神的安定は、子どもとのかかわり方にきわめて大きな影響を持つものであり、子どもの心身の発達に及ぼす影響も大きいと考えられる。

図D-2に「近所でふだん世間話をしたり、赤ちゃんの話をしたりする人はいますか」という質問結果を示している。まず気づくことは、1980年の「大阪レポート」と比較した場合、乳児期の親の孤立化が極端に進んでいることである。4か月児健診での結果を比較すると、「1～2名」もいない全く孤立している母親が16%から35%へと2倍以上に増加し、3人に1人の親が孤立している。

図C-2 近所でふだん世間話をしたり、赤ちゃんの話をしたりする人がいますか。



図C-2のもうひとつの特徴は、本調査の場合、児の月齢とともに母親の話相手が急速に増えることである。「大阪レポート」の結果では、そのような変化は見られない。ただ、増えると言っても「大阪レポート」のレベルまでは達していないのであるが……。

また、「親子で一緒に過ごす子育て仲間がいますか」という質問では、「大阪レポート」ではされていない質問であるが、その結果は、「いいえ」と答える母親が4か月児健診：31.8%、10か月児健診：29.8%、1歳6か月児健診：25.6%、3歳児健診：23.1%、となっている。

児童虐待予防方策として、「話し相手がない」「子育て仲間がない」という母親を無くすことが

重要である。ここ数年広がってきた「子育てサロン」などをさらに増やすことが求められている。現在の「子育てサロン」は、参加した親と親をつなぐ、という役割を意識的にはされていないように思う。今後、単に親が集まれる場所の提供だけにとどまらず、「親と親をつなぎ、親を親として育てる」という役割を意識的に担うことが必要である。そのためには、スタッフの意識変革が必要であろう。

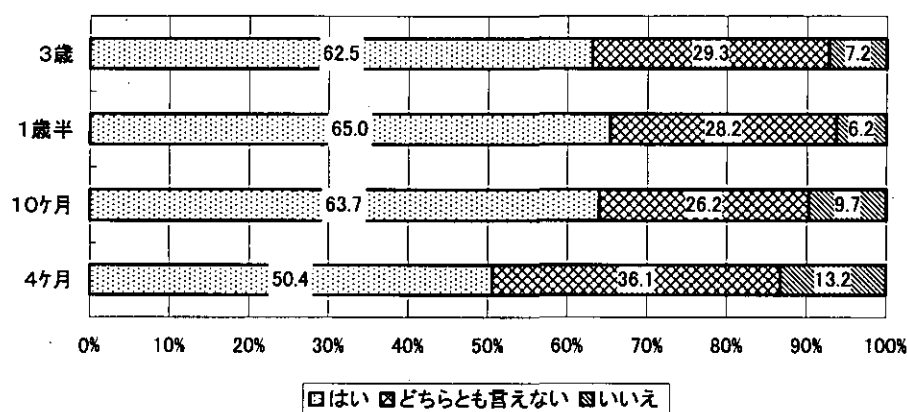
D-1-3 子育てにおける母親の心の動き

子育てにおける母親の心の動きについていくつかの質問をしている。それらの結果を紹介する。

多くの母親たちは精神的には健康である

「赤ちゃん（お子さん）をかわいいと思いますか」という質問に「はい」と答える母親は、児の月齢と共に率は減少するが、97～99%と非常に高い数値である。また、「赤ちゃん（お子さん）と一緒にいると楽しいですか」という質問でも、児の月齢と共に率は減少するが、87～95%の母親が「はい」と答えている。このように母親たちは子どもに対するプラスの感情をしっかりと持って子育てをしていることがわかる。これらの結果は大多数の母親が精神的に健康である、とことを示すものである。

図D-3 子育てを大変と感じますか（「兵庫レポート」）



大きい「子育ての負担感」

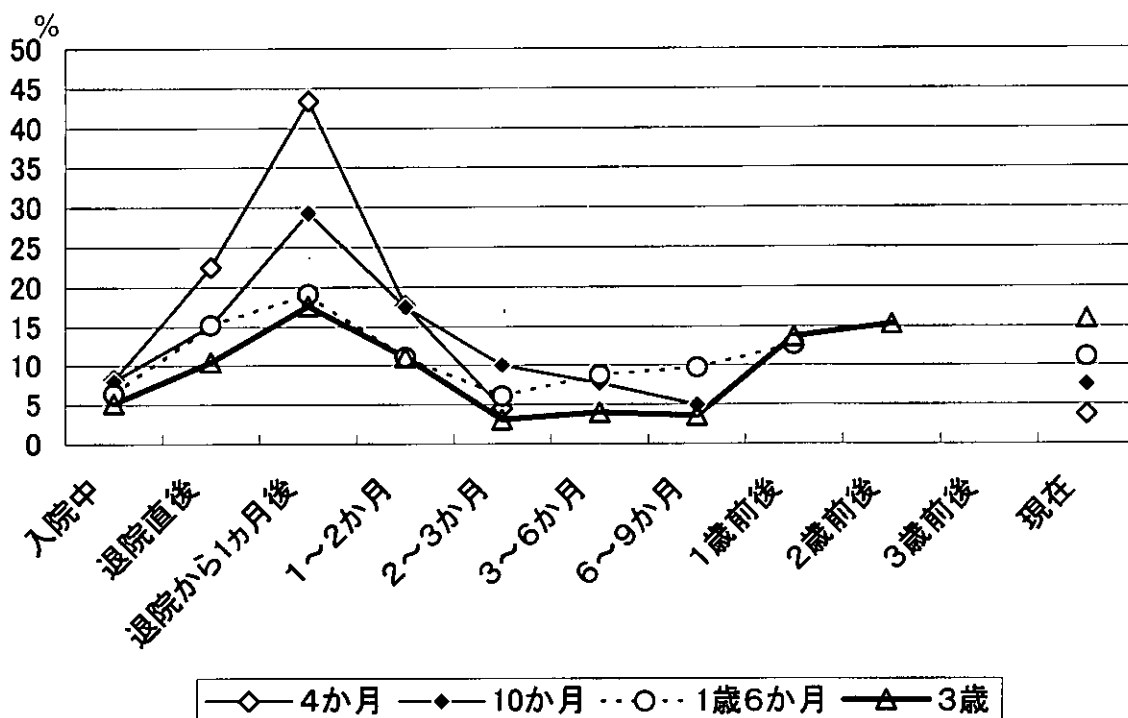
一方、「子育てをたいへんと感じますか」という質問では、図D-3に示すとおり、4か月児健診以外では、62～65%の母親が「はい」と答えており、子育ての負担感が大きいことを示している。子育ての負担感、4か月健診よりも他の健診時点で増加しているのが特徴である。子どもの自我がめばえてくるにつれ「子どもを知らない」という現代の親たちの戸惑いが増え、また子育てしにくい日本社会の現実が子育ての負担感を増大させているものと考えられる。

子育て不安は大きく増加している

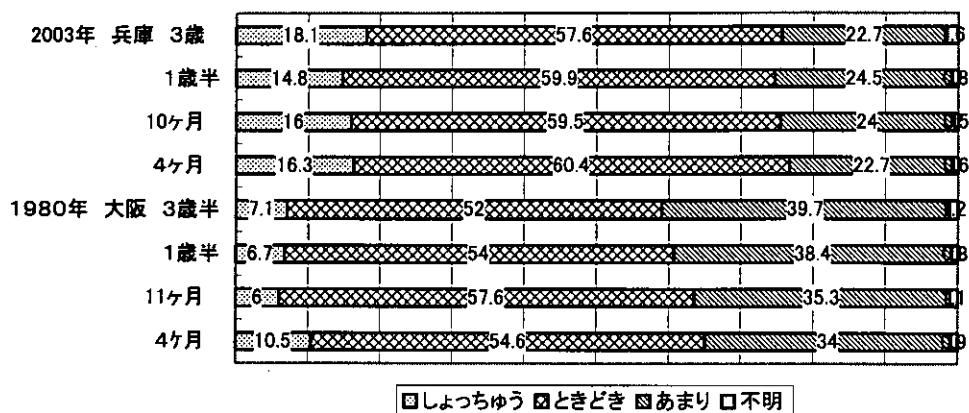
図D-4に、「育児の中で一番心配なときは、いつでしたか（1つに○）」という質問結果を示している。「大阪レポート」でも同様の結果が得られている。『平成15年版 厚生労働白書』に掲載された図は、「大阪レポート」のこの質問の図である。この図が示していることは、「育児の心配な時期は、2峰性である」ということである。すなわち、「退院から1か月」に最初のピークがあり、その後1度下がるが、1歳前後から再び不安が高くなり、遷延するのである。ちなみに、4か月児健診では、「退院から1か月」が43.4%と圧倒的に多いが、3歳児健診では、1歳前後：13.7%、2歳前後：15.3%、現在（3歳前後）：15.9%、であり、合計すると、44.9%にもなっている。この結果は「大阪レポート」の時点では予測していなかった結果であった。しかし、今回の調査でも同じである。「大阪レポート」では、「小学校入学後の6月」に調査を実施しているが、その結果も加味すると、子育てにおける心配

事はその内容を変えながら、長期に遷延することがわかる。

図D-4 育児の中で一番心配なときは、いつでしたか（1つに○）



図D-5 育児のことで、今まで不安なことがありましたか



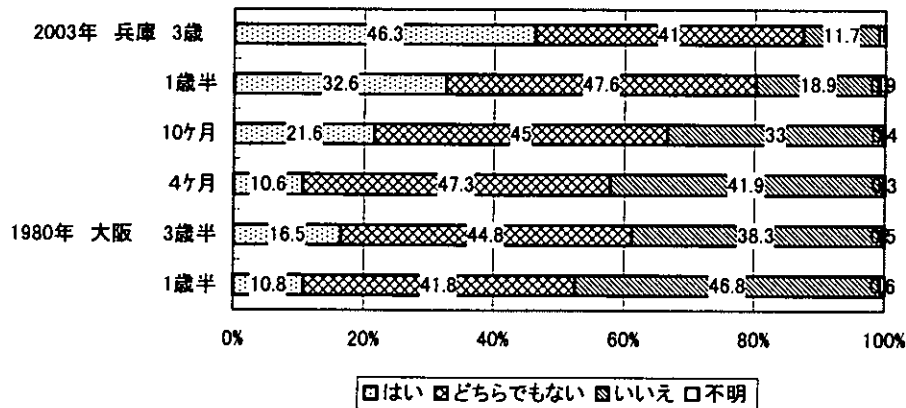
「育児のことで今まで心配なことがありましたか」という質問結果を図D-5に示す。児の月齢での変化はほとんどないが、「大阪レポート」と比較すると、「しよっちゅう」心配だったと訴える母親が、6~7%から16%前後へと大きく増加していることがわかる。逆に、「あまり」心配ではなかったという母親は、34~40%から22~25%へと減少している。

児の月齢ともにつる「イライラ感」

子どもに対するプラスの感情をしっかりともっているにもかかわらず、多くの母親が「子育ての負担感」を訴えていることがわかった。図D-6に「育児でいらいらすることは多いですか」という質問結果を示す。今回の調査では、「いらいら感」が児の月齢とともに急増することが判明した。すなわち、「大阪レポート」では「はい」が1歳6か月児健診：10.8%、3歳児健診：16.5%であるのに対し、今回の調査では、4か月児健診：10.6%、10か月児健診：21.6%、1歳6か月児健診：32.6%、

3歳児健診：46.3%、と大幅に増加している。この「イライラ感」の急増は、児童虐待と深く関係しているものと思われる。

図D-6 育児でいらいらすることは多いですか



以上調査結果の一端を紹介したが、ほんの20数年の間にも子育て真っ最中の母親の状況は大きく変化していた。その変化の方向は残念ながら、「大阪レポート」で警鐘を發したにもかかわらず、さらに悪い方向に向かっているのである。

子育て支援ボランティア活動をしながらか強く感じることは、「今なぜ、子育て支援が必要なのか」という最も根本のところ、支援者側が納得できていない、ということである。専門職や行政の子育て支援担当者がここに示した子育て現場の実態を十分認識するひつようがあるのではないかと考える。

D-2 激化する子育て競争を色濃く反映する親子関係

— 「孤立・不安・競争の子育て」から脱出し、「安心と信頼、共同の子育て」を！ —

ここでは、「親子関係の変化」についての調査結果を紹介し、子育て競争が激化する日本の子育て現場について考えたい。

大きく変貌する親子関係

本調査では、我々がまったく予想していなかった調査結果がいくつか出てきた。そのひとつが親子関係の大きな変化である。図D-7～図D-9にそれぞれの健診時点での親子関係を「大阪レポート」と「兵庫レポート」の結果とを比較して示している。

図D-7～図D-9は、「田研式、親子関係診断テスト」⁵⁾から代表的な質問項目を選び使用した。田研式の親子関係診断テストでは、消極的拒否型、積極的拒否型、厳格型、期待型、干渉型、不安型、溺愛型、盲従型、矛盾型、不一致型の10の軸を設定し親子関係を考えている。そして、それぞれの軸について10個、合計100個の質問で総合判定をするように構成されている。本調査では、それぞれの軸について代表的な質問を1つずつ選び、調査した。しかし、田研式の親子関係診断テストの文言が変更されている項目もあり、今回はその変更された項目を採用した。今回使用した質問項目は以下のとおりである。

- ①消極的拒否：「このお子さんとは何となく気が合わないように思いますか」
- ②体罰：「子どもをしかるとき、たたく、つねるとか、けるなどの体罰を用いますか」
- ③厳格・禁止：お子さんのしていることを「あれはいけない」「これはいけない」と禁止しますか
- ④期待：お子さんをよそのお子さんと比較して見ることが多いですか
- ⑤干渉：お子さんがしていることを黙って見ていられなくて、口出ししますか
- ⑥不安：育児で不安になることはありますか
- ⑦溺愛：子どもだけが生きがいだと思っていますか
- ⑧盲従：お子さんがおもしろそうにしていれば、悪いことでもしかったり禁止したりできにくいです